
じいちゃんが死んだので

えだまめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じいちゃんが死んだので

【Nコード】

N6034Y

【作者名】

えだまめ

【あらすじ】

主人公”千葉健人”の祖父である”千葉竹介”は急死した。竹介は幽霊となり健人の元に現れこう言った。『あと一年で日本中の人を幸せにできなければわしは地獄に落ちる、助けて欲しい。』かくして健人は幽霊である竹介と共に日本を幸せの渦に巻き込むべく奮闘していくことになる。

第一話

俺の名前は千葉健人、市内の公立高校に通う高校二年生だ。自己紹介をしておいてなんだが、話はさっそく本題に入る。

今朝じいちゃんが死んだ。

本今朝5時。目覚まし時計で起きたばあちゃんは隣で寝ているじいちゃんを起こそうと何度か呼びかけたが返事がなく、ばあちゃんに呼ばれた家族がじいちゃんの元に駆けつけ呼吸を確かめてみれば・

・

じいちゃんの名前は千葉竹介。ちはたけすけばあちゃんとは喧嘩が絶えないが当の本人たちは「これぐらい張り合いがなきゃだめだ」なんてよく分らないことを言っている。

寿命、事故、病気、どんな形であれ人は死ぬとあの世へと旅立って行く。キリスト教で言えば天国、仏教なら極楽浄土。ほかの宗教がどんな教えかは俺には想像もつかないことだが、生前の行いが悪いものでさえなければ人は天国へと昇って行く。

俺のじいちゃんは何と考えたとき、じいちゃんはとても良い人なんて言えやしないが悪い人でないのは確かなので多分今頃は天国にいるだろう。雲の上から茶でも飲みながら「ばあさんのやつわしが死んであんなに泣いとるわ！あんなにわしをバカにしとったくせになあ、ワッハッハ」なんて言ったりするかもしれない。俺は部屋の窓を開けて空を見上げたがじいちゃんの姿は見えなかった。靈感のある人には見えるのだろうか。

時計の短針は3時を指している。じいちゃんが死んだのは今朝のことだったのに家族の慌てっぷりは未だに収まらない。どこから電話すればいいだの火葬はいつまでだのじいさんの遺体はどうするだ

の朝ご飯はもちろんのこと昼ご飯まで食べずにこの時間まで騒いでいるほどだ。

こんなとき普通は学校に行くのか行かないのか俺には一般常識がないのでよく分からないが、どさくさに紛れ学校を休んだ。ただサボりつてのは気が引けるので学校には電話を入れておいた。

”死人に口無し”誰が言ったのかは知らないがばあちゃんはいつもと違いじいちゃんが言い返してこないのいいことに死んだじいちゃんに向かつて「あんたが急におっちゃんじまったもんだから、うちん中は大騒ぎだよ！あたしに何も言わずに逝っちまいやがって、あたしはあんたの世話役じゃねえんだからてめえの死体ぐらいてめえで片付けやがんな」なんて涙流しながらじいちゃんの冷たい手を握って叫んでいる。

以外にも静かなのが父さんで、「俺がしつかりしなきゃ、俺が焦ってどうする、俺が引つ張んなきゃなんだから」なんてぶつぶつ念仏のように唱えて気持ちを落ち着けているが随分白い顔になっている。

母さんは親戚やら役所やら片っ端から電話を掛けて回って、それで妹を学校に送り出したり案外一番しつかりしていた。俺が学校休んだと言ったときも「じゃああんたにも手伝ってもらうからね」と言い含めてきたり、大黒柱はこの人なんじゃないかと思わせるほどの働きであった。

妹はまだ小学一年生なので何が起きているかも分からないまま頭の上に疑問符を浮かべて登校していった。ゆくゆくこいつに話すときにはなん言ったらいいのだろうか・・・

俺は何をしたらいいのか母さんの支持を待ったが電話口から離れる気配がない。不謹慎なことではあると思うが俺は昼寝をするここにした。

「・・・と・・・んと・・・んと・・・けんと・・・」

俺は俺の名前を呼ぶ声で目を覚ました。

「やつと起きおつたか」

「うわっ！じ、じいちゃん！？」

「そうじゃそうじゃ、わしじゃ」

俺の目の前、いや腹の上にはあぐらをかいて座るじいちゃんの姿があった。

「ゆゆゆつ幽霊！？」

「失礼なっ、もっと柔らかい言い方をせんか！」

じいちゃんは俺を叩こうと拳を振り下ろしたが拳は俺の胸を突き通ってしまった。

びつくりして俺はじいちゃんを突き飛ばそうとしたが俺の腕もじいちゃんを突き通った。

じいちゃんはそれが面白かったらしく不適な笑みを浮かべた。

「たっ崇られる！」

「誰が崇るかアホ！わしは悪霊じゃないわ！」

「じゃ、じゃあ何しに来んだよ！」

「おおお、聞いてくれるか！」

じいちゃんはそう言う俺の腹の上から降りて窓際に立った。

そして感慨深そうに空を見上げて言った。

「わし、死んだじゃろ？死んだときは驚いたわ。朝起きたらふわふわ浮いとつてな？見下ろしたら自分が布団で寝とった。一瞬何が起きたか分からなかったがすぐに自分が死んだんじゃと悟ったわ。それからうるさいやつじゃが嫁は嫁じゃからな、ばあさんに『達者でな』言うて家の外に出たんじゃよ。それで空見上げたら雲の切れ目から子供のかわいい天使が四人降りてきてな、わしに向かってこう言ったんじゃ『自分で歩けんだろ？ちよつと来いや』口は悪いが天使は天使、天国に連れてかれるかと思ったら地獄の閻魔様のところに連れて行きおった。それで閻魔様は言いよった。『お前は悪人と善人の判断が非常に難しい立場のまま死んだ。できれば地獄に引き入れこの溶岩の風呂にでも入れてやりたいところだが天使たちが駄

目と言うのでな。話し合い結論を出した”もしもお前があと一年で日本中の人々を幸せにできたら天国に行かせてもいい”と」

じいちゃんはそのこそ信じろという方が難しいようなことすらすら言い続けた。

「閻魔様がそう言い終わったとき、目の前がピカツと光って気が付いたらこの部屋におった。お前はそんなときそこで寝ておったからわしは一階に降りて行ったんじゃ。夢に違いないと思ったが自分の死体の横で泣きながら文句言うばあさんを見てな、ようやく理解したわい。そこで考えたんじゃ、日本中の人を幸せにつて言っただってこんな体のわしに何ができる？家族の誰に声をかけても触ろうとしてもだめ、諦めようかと思っておったが駄目もとで寝ているお前に声をかけたらな、『うるさいな、静かに寝かせてくれよ』なんて寝言を言いおった！わしはもう嬉しくつてなんどもなんども声を掛けて今に至るわけじゃ！」

俺はじいちゃんの話半信半疑でしか聞いていなかったがじいちゃん俺の前で両手を合わせて言った。

「ばあさんに言われ放題になっちゃったのはまだ耐えられる！しかし地獄に落ちるんだけは耐えらんのだじゃ！頼む！助けてくれ健人！わしが見えるのは健人だけなんじゃ！一緒に日本を幸せの渦に巻き込もう！」

じいさんの幽霊としない高校生に日本が変えられるものか、何度も断ったがじいちゃんは”協力すると言わぬのなら毎日夢枕に化けて出る”と脅しかけて来たので俺は仕方なく承諾してしまった。

これが俺の悪夢の始まりだった。

第二話

「ほんにまあ、あんた竹介さんのお孫さんらかね」

千代と言つおばあさんは言つた。

「言われてみればほつぺたの膨らみ方が竹介さんにそっくりらね」
千代さんは曲がつた腰を伸ばして、腰に当てていた腕を俺の顔へと伸ばし、しわしわの手で俺の頬を撫でた。

何かを確かめるように俺の頬を撫でたあと千代さんはゆっくり手を引つ込めた。

「竹介さん、逝つちまつたんだってね、葬式の日はせがれ夫婦のそこに行つとつて来れんかったすけ、手を合わせに来たんよ」

「ありがとうございます、じいちゃん喜ぶと思います。上がつて下さい、その部屋にじいちゃんの仏壇がありますから。俺はお茶淹れますから」

「悪いね」そう言つと千代さんは綺麗に靴を揃えて玄関から上がった。仏間へ案内し千代さんがじいちゃんの仏壇の前へ正座したのまで見て俺は台所へ向かつた。

戸棚から茶葉の入った缶を引つ張り出して茶を淹れる。茶菓子は何がいろいろ、適当に煎餅でいいか。二人分の茶と煎餅を盆に乗せ仏間への廊下を進む。

今日は月曜日。海の日で学校は休みだ。うちの両親はばあちゃんと初七日がどうかなんとか言いながら知り合いの住職に話を聞いてくると言つて車で家を出て行つた。妹はじいちゃんの死んだ翌日、母さんからその旨を伝えられたが人の死に直面した実感はないらしく生活もいつも通り、今日も友達とプールに行つてくると鼻歌を歌いながら水着を持って出て行つた。幽霊になつたじいちゃんも千代さんが来る二十分程前に”出かけてくるわい”と言い残しふらつと家を出て行つた。

「お茶、熱いんで気を付けて下さい。それとこれもよかったですぞ」

お茶を千代さんの前に出して煎餅を勧めた。千代さんは”ありがとうね”と言って湯呑に口をつける。

「お茶淹れるの上手だね」

「ありがとうございます」

湯呑を置きじいちゃんの仏壇を眺めて千代さんは思い出すように話始めた。

「竹介さんは昔頃から悪さばかりしよる人だったすけ、仏さんが見かねて連れてつちまったのかもしれないね。」

「じいちゃん、不良だったんですか？」

「いんやね、不良なんてことはないけれど、誰かのためなら何でもできる人やったんよ。私らが小学校の三年生の時、私は女の子なのに音楽が苦手でね。歌うのも笛も吹くのもだめで”音楽なんてなくなればいいのに”って言うちまった。それを聞いてた竹介さんはその日学校が終わると一人で楽室に忍び込んでピアノのピアノ線をみーんなはさみで切っちゃった、みんなの教科書もビリビリに破いて音楽の授業ができないようにしちゃった。」

「めちゃくちゃ悪ガキじゃないですか」

「次の日竹介さんは先生に怒られて、放課後はお父さんとお母さんとじいさんとばあさんまで連れて一家で学校に誤りに来とってね学校のみんなは腹抱えて笑っておったけど、私は嬉しくてたまらなかった。そのまた次の日、私が竹介さんに『ありがとう』って言うたらあの人『音楽の金城先生が嫌いだかから嫌がらせしてやったんだ』って目も合わせてくれなかったよ。」

それから千代さんはいくつかじいちゃんの話をして帰っていった。俺はじいちゃんの知らないところを知ることができてちょっと嬉しかった。じいちゃんは良い人じゃないけど悪い人でもないのだ。

それをはっきり確信したのだ。

俺が台所で湯呑を洗っていると後ろから声がかけられた。

「千代ちゃんが来とったんか」

振り返るとじいちゃんの姿があった、うつすら透けていてふわふわ浮いている。

「ああ、仏壇に手合わせに来てくれたんだよ」

「そうか・・・」

湯呑の水をきり食器乾燥棚にのせ蛇口を締めて、それからじいちゃんに聞いた。

「今日はどこ行ってたんだよ、さっそく日本中を幸せの渦に巻き込んでたわけじゃないんでしょ」

「・・・よし」

じいちゃんはそう呟くと天井をすり抜けて上の方に飛んで行った。

「ちょー!」

じいちゃんは何を始める気なのか、階段を駆け上がって二階へ行くと部屋にじいちゃんの姿はない。

「まさか・・・」

ベランダに出て手すりに足をかけ屋根の上を覗くとそこにじいちゃんはいた。

「何してんだよ!」

「おお、健人。お前もこっちに来い! わし、決めたんじゃ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6034y/>

じいちゃんが死んだので

2011年12月3日18時55分発行